

ニュースレター

ヘリンガー インスティテュート ジャパンより

News-letter from Hellinger Institute Japan

このメールは、これまでに小林真美（チェトナ小林）のファミリー・コンステレーション、システムック・コンステレーションのワークショップにご参加いただいた方々にご登録の方々にお送りしています。

15-2015/08/23

こんにちは。

ヘリンガー・インスティテュート・ジャパンの小林です。

最低でも毎月1回はニュースレターをお送りしようと思論んでいたのですが、6月から7月末にかけて出版前の仕上げの作業が怒濤のように押し寄せていて、とうとう7月は一度もニュースレターに着手できませんでした。なんとも申し訳ありません。

脳の中に思い描いていた自分像では、私ったらものすごく切れ味よく、翻訳も校正もサクサクスッパスパ仕上げていっていたのですが、実際の私は髪を掻きむしりながらアウッ、とか叫んではのたうちながら、机に自分を縛りつけていたため、翻訳校正以外には一切エネルギーを向ける余裕がありませんでした。ごめんなさい。

とにかく、今持てる力を振り絞って、ようやくその本を作り上げました。

バート・ヘリンガーを一躍世界的に有名にした原点とも言うべき書が、9月1日に発売されます。

「恋愛至上主義と結婚とその人の結婚観について」

このところ思い巡らしていたことがいくつかあるのですが、まだとりとめがなく、お見せするに値するかもものかどうか、今ひとつ悩むところですが、それにしても、何について思い巡らしているか、その内の一つだけでも書きだして見ることにします。

先日、友人と話をしていて、その人の姪御さんが37歳にして彼氏もいなさそうで、結婚する気配が薄くて心配になると耳にしました。

私も知っているのですが、非常に真面目で、仕事熱心な、とても奇麗で素直なお嬢さんです。純粹培養みたいな女性です。

その友人の心配を聞いてから、私もあれこれ心配して考えています。

恋愛至上主義が世間を席卷して、浸透して、かれこれ70年経っておりますが、そもそも恋愛結婚に向いていない人も存在するということを私たちは視界から消しているのではないかと最近気づきました。

たとえば、恋愛に憧れてみるとか、妄想してみるとか、それって普通のことのようにですが、本当にあなた自身が真に望んでいることなのでしょうか？

ある男性たち、ある女性たち（もしかしたらほとんど女性？）は、いつか、夢のような素敵な出会いが自分に降ってきて、このありふれた日常から連れ出してくれると、その日が来るのを待っています。

10代や20代ならいいのです。

でも、40歳前後でそれはどうなのでしょう？

でね、日本の路上や、お宅の玄関口に、白馬に乗った白いタイツをはいた王子さまは似合わないんですよ。

ドレスを着てスーパーマーケットに行くのをひっかけて不便ですよー。それに、白いタイツの王子さまとドレスのお姫様が40歳前後ではあまり絵にならないんですよ。

ここ何十年も、日本全国津々浦々、多くの人が恋愛でなければ結婚できないというような、脅迫観念じみた幻想に縛られているのではないかと思うのです。

例えば、かつてはお見合いという制度が生きていて、縁あって出会って、結婚してからお互いに愛情を抱き合うという過程も、そうしてできた家庭も幾つもあったのです。

そして、近所や親戚にはおせっかいで面倒見のいいおじさん、おばさんがあふれていて、20代半ばで独り身の娘や息子がいると聞けば、どんどん知り合いの親戚縁故を紹介してくれていました。

なので、積極的でなくても、口べたでも、人見知りでも、世話焼きな大人たちがなんだかんだと出会いの場を設けてくれていたおかげで、多くの人たちは縁に恵まれて、家族を持つことができていたのですが、個人主義と恋愛至上主義が行き届いて、現在ではそのようなおせっかいで面倒見のいい大人たちは絶滅危惧種に指定されています。

果たして自分が恋愛に向いているかどうか、奥手な人、恥ずかしがり屋な人、真面目すぎる人、恋愛の数は多くても同じ数だけ失敗するのが上手な人たちは、自分を振り返って見てもいいかもしれません。

それから、恋愛上手と自分を思っている人も、何を持って恋愛上手なのか、恋愛の目的とはなんなのか、もう一つ突き詰めてみてもいいかもしれません。

何年か前の話ですが、欧米人たちと雑談していたときに、ある白人男性が「女性は相手に愛情を抱いてから性行為に行き着きたいと願う、男性は性行為の後で相手に愛情を抱き始めるものだ」と言うのを聞いたことがあります。

そのときは、「へ～、そうなの？」ってあまり深く考えなかったのですが、後で思い起こすととても奇妙に感じました。

それって一般的なことなのでしょうか？

その人が男性全員の代表とも思えないし、また白人男性はみなそうだとも思いません。

もし、そうだとしたら、戯曲の「シラノ・ド・ベルジュラック」の物語は成り立たなくなってしまうからね。

また、西欧の文化の変容もすごい勢いで起きています。

これもまた数年前にオーストリアの知人から聞いた話ですが、（ヨーロッパの他の地域でもそうなのかは知りませんが-もう書いたかな？）今時の若い男性と女性は一緒に住んでも、子供を作っても結婚しなくなっているそうです。

社会保障が行き届き、籍を入れても入れなくても待遇が同じになってしまったので、結婚の意味が失われてしまっているそうです。

ん~~~~、何か疑問を感じます。

西欧で起きていることを、かつては先進的だと何でもかんでも導入すればいいという風潮が日本にあった時期もありましたが、今はそんな時代ではなくなっています。

彼らの社会に起きている変化が日本という国土や、民族性に合っているかどうかは、う~~~~む、はなはだ疑問です。

男性の純情や、無垢な愛、無償の愛をどうも私は信じているようです。

あの、さももっとも風な解説は、すれちゃった中年のおじさんの自己正当化だったのかな？

でも、そう思っている男性も確かにいるとしたら、女性もきちんと見分けることができる目を持たなくてはなりません。

問題というのは、自分に対しての思い込みです。

自分はどうだ、こういう人間であると信じていることが、私たちに大きな制限を与えます。

しかし、その思い込み、セルフイメージはどこから始まっているのでしょうか。

また、自分の判断力という軸が正しいかどうか、何によって確信できるのでしょうか。

もし軸が不安定であれば、大量に入ってくる情報に私たちは翻弄されてしまうことになり、自分自身に合っているかどうかも考えずに、流れ込んでくる情報を鵜呑みにして、自分像だと勘違いして信じてしまうかもしれません。

今もしも、結婚に憧れを抱いていて、現実には相手もいない状態で、ステキな出合いを夢見ている人は、自分が果たしていわゆる恋愛に何を求めているのか、ちょっと点検してみてもいいかなと、世話焼きのおばさんは思ってみる次第です。

長くトレーニングを受講し続けている古参のトレーニング生のある方は、私のことをお節介おばさんではなく、近所のカミナリオヤジだと称しましたが、こちらも絶滅危惧種ですね。

* * * * *

小林 真美 (チェトナ小林)
ヘリンガー・インスティテュート・ジャパン
<http://www.hellingerinstitutejapan.com/>